映画の中の学校

校長　山田浩之

一月の末に映画館で久しぶりに映画を見ました。タイトルが「小学校～それは小さな社会～」というドキュメンタリー映画です。東京都の一つの公立小学校を撮影し続けた作品です。カメラは、春から次の春までの一年間、主に一年生と六年生、そしてその担任を追っています。例えば、次のようなエピソードがあります。

次の入学式で、今の一年生が歓迎の合奏をすることになりました。ある女の子が、シンバルの役をやりたくて、オーディションに臨み、何とかその役を勝ち取りました。しかし、その後、あまり上達せず、練習の際に音楽担当の教員に厳しくしかられます。女の子は、その後、練習に出たくないと言うのですが、担任の先生から背中を押され、練習を再開し、見事本番で演奏することができました。

ほかにも、運動会で縄跳びによる集団演技に挑戦する六年生の男の子が、最初は、なかなか二重跳びができなかったところ、練習を重ね、できるようになっていく姿。その六年生の担任が、子どもの成長を期待しながらも、どのように接していけばよいのか悩む姿。

このようなエピソードが、いくつも紡がれていきます。それぞれに、子どもも教員も、困難な状況に陥ったり、壁にぶつかったりするのですが、それを自らの力で、または周りの人の助けを借りて乗り越えていく姿は、見ている人の心を動かします。それが現実に起きていることであるがゆえに感動し、涙が出てきます。

ところが、映画館の扉を出て一緒に見た妻との最初の意見交流は二人とも一致して「普通の学校だよね」というものでした。感動している気持ちと相反しているようですが、いつも見ている普通の学校、当たり前の日常が切り取られている、という感想でした。子どもが自らの役割を果たさずに叱られている姿。一年生の世話をしている六年生の姿。自分の課題に精一杯向かい成長していく子どもの姿。悩みながらも子どもに向き合い、大切な思いを伝えようとしている教員の姿。どれも、新潟小学校でも、これまで勤務したどの小学校でも見られた光景です。もちろん、具体的な教育活動は、学校によって違うものです。しかし、子どもの姿も教育の背景にある理念や思いも全く同じだと思いました。

そして、あと数日で卒業式を迎える新潟小学校の六年生も、この映画の中の六年生と同様に、感動を呼ぶような頑張りや成長を遂げているのです。